

この記事がすごい！ 毎日新聞今週のこだわり4本



2025年1月12日号

編集／毎日新聞社カスタマーリレーション本部

被災者へ支援を ゼロから始めた市民運動

12日(日)=1、3面

迫る



6400人以上が亡くなった阪神大震災から間もなく30年。上野泰昭さん＝写真＝は父のレストランを継いでいましたが、震災によ

りビルが損傷し営業できなくなってしまう。既に金融機関から融資を受けていて返済がのしかかります。自宅は全壊を逃れ、家族も無事でしたが、自殺を考えるまでに追い詰められます。その後、自分と同様、救済がなく苦しむ被災者が多いと知り、国に公的支援を求める市民運動を展開します。それまで市民運動の経験はゼロ。国会議員への働きかけや、議員会館前でのハンガーストライキなどを繰り返し、少しずつ支援の枠組

みが作られていきます。でも神戸の震災にすべてが適用されるわけではありませんでした。

再起をかけてスナックを始めますが、三宮の街にかつての活気は戻らず、廃業に追い込まれてしまいます。日本では能登半島地震のように毎年のように災害が発生し、支援が及ばない被災者も絶えません。上野さんはいま、神戸を歩きながら何を思うのでしょうか。

専門記者、高尾具成記者の執筆です。

論点

阪神大震災から30年 教訓と課題

17日(金)=オピニオン面

今月17日で阪神大震災の発生から30年を迎えます。国内では、その後も東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨など大災害が相次ぎました。その中で、ノンフィクション作家の柳田邦男さん(88)と、阪神大震災直後から被災者の救援活動を実践している「被災地NGO協働センター」(神戸市)顧問の村井雅清さん(74)が、震災の教訓や学び、課題について語り合いました。



大漁となった寒ブリを選別する
漁協の職員たち



日本の漁獲量が減り続けています。2023年は統計開始以降最低となる370万トンあまりで、30年前の3割に落ちてしまいました。背景には、国際的なルールの影響に加えて、海水温の上



減り続ける日本の漁獲量

12日(日)＝総合面

昇があります。一方、漁獲量の減少に歯止めをかけようと、生産力を維持できる「持続可能な漁業」が各地で進んでいます。こうした取り組みも紹介し

特集 ワイド

混迷の時代に 天童荒太さん

14日(火)=タ刊2面



年頭にあたり、社会の今そしてこの先について考える企画「混迷の時代に」。最終回は作家の天童荒太さん＝写真＝です。現代人の孤独や心の傷を見つめ続けてきた天童さん。本紙朝刊で連載した初の本格時代小説「青嵐の旅人」でも、虐げられる庶民の視点を大切にしました。その目に映る世のゆがみ、ひずみとは？ 荒波を乗り越えていくヒントはどこに？ 大いに語ります。

竹橋の窓辺から

編集後記



毎日新聞デジタルの連載「お笑いの向こう側」に登場したAマッソマカナメストーションマ街裏ピンク——の3組がネタを披露する連載イベントを23日、東京・渋谷で開催します。



新聞社主催のお笑いらしく、記者会見ふうの限定企画あり。オンライン配信・アーカイブ限定で、楽屋での反省会も見れますので、QRからぜひお申し込みください。

(石原聖)

毎日新聞